

# Monthly News

## No. 120

平成27年度近畿部会第128回例会を下記のとおり開催しますので、ご参加くださいますよう、ご案内申し上げます。

## 近畿部会第128回例会

- とき 平成27年8月12日（水）午後2時～4時30分

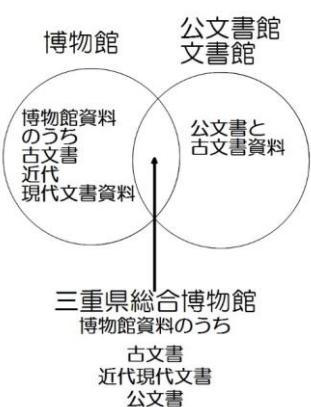
■ところ 三重県総合博物館 レクチャールーム  
所在地：〒514-0061 三重県津市一身田上津部田 3060  
電話：059-224-2057  
交 通：近鉄名古屋線・JR紀勢本線・伊勢鉄道 津駅西口下車  
バス89系統総合文化センター行き 「総合文化センター」  
下車すぐ <http://www.bunka.pref.mie.lg.jp/MieMu/>

■テーマ 「三重県総合博物館における公文書館機能と資料閲覧利用」

■報告者 藤谷 彰 氏（三重県総合博物館 展示・資料情報課 主幹）

■内 容 今回の例会は、三重県総合博物館が有する公文書館機能に注目します。

三重県総合博物館は、平成26年4月19日に、人文科学及び自然科学の両分野にわたる資料を総合的な立場で取り扱う総合博物館として開館しました。三重県総合博物館の特徴の一つは、図のように、博物館資料である文書資料（史料）の内、三重県が作成した公文書が、歴史資料文書へと変質する一連の流れにおいて、博物館資料として収集し、保存し、閲覧することを博物館のシステムの中に取り入れていることです。



この特徴の背後には、博物館が収集、保存し、調査、研究、展示、教育普及のサイクルに乗せていく史料について、公文書館法と公文書管理法を博物館機能に包括させていることが挙げられます。

このように、公文書館機能を取り入れて開館した博物館は、あまり類例がありません。その意味で、三重県総合博物館では、史料閲覧という公開機能において、史料をどのように取り扱っているのか。とても関心の高いところです。

この例会では、三重県総合博物館の取り組みと実際を体感できる好機会です。多数の御参加をお待ちしています。

## 第127回例会報告

日 時：平成27年6月26日（金）14時40分～  
場 所：京都府立総合資料館 2階 会議室  
参加者：33名

### テーマ 戦争体験を伝えていくために

—アーカイブズが背負う使命—

報告者 加藤 聖文氏（国文学研究資料館准教授）

戦後70年の本年は、さまざまな形で戦争が語られている。戦争に関わる記録は多用な形で残されてきているが、報告者は、人生80年とされる現代では、70年の今年が重要な転換点となると力説される。

実際にさまざまな地域で戦争に関わる記録は保存されている。まず、例としてあげていただいたのは、福岡市で「引揚港博多を考える集い」が収集した満州など大陸からの引き揚げに関する資料、また高知県において高知新京会が収集した歴史資料という2つの史料群のことだ。前者は福岡市が大陸からの最も大きな引き揚げ港であったため様々な資料が残っていたが、港のそばに資料館建設をと願ったが、港から遠い市民福祉プラザの一角に展示コーナーが設けられたことに終わったこと。高知新京会の資料は、記念誌等を発刊するために集められたが、会員の高齢化や雑多な資料群であるため公的な機関で受け入れが難しい状況にあるが、地域によって保存の努力が行われていることを示していただいた。

こうした戦争資料が、分量が多く、形態が複雑かつ歴史的な解釈が厄介であることや、現在の県市町村など地方自治体を中心とした地域概念ではなく、満州から引き揚げて他の県へと帰還する人びとの資料や、中国の新京という街に日本各地から入植した人びとの資料であるため、地理的概念に固執してしまうと、受け皿がなくなってしまうことを指摘された。

次は、県市町村などの自治体が保有する行政文書（公文書）の問題である。特に援護関係の公文書の多くは、現在も現用文書として保存されており、その多くはアーカイブズ機関への移管が行われていない。その一方援護行政は対象者の高齢化などにより年々縮小されており、時間経過と共に職員も全てを把握できなくなっている実態があるのではないかということであった。また、国の諸機関を通して把握が可能な情報でも、地方自治体の個人情報保護条例が壁になって、請求者も職員も無駄な労力をかけているのではと指摘された。

ドイツやリトアニアなどの公文書館では、「個人の監視文書」までが公開され、よりよい社会を築くためには、現実を直視して「社会が共有すべき歴史」という市民のコンセンサスが確立しているとされ、戦後70年、日本においても社会が共有すべき歴史をもう一度見直し、記録の保存についてアーカイブズを中心に民間文書を含めて見直すべきとされた。

報告後、活発な討議もあり、戦争の記録の保存に関して幅広い関心があることが改めて感じられた。

（運営委員 金原祐樹）